

# 保育内容領域「環境」に関する課題について

三 川 明 美\*

## Issues in the Childcare Content Academic Field of “Environment”

Akemi MIKAWA

**Key words** : 環境 Environment, 生活 Daily Life, 自然 Nature, 幼稚園教育 Kindergarten Education

### 1. はじめに

幼稚園教育要領、第1章総則の第1幼稚園教育の基本の最初に書かれているのは「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」<sup>1)</sup>とある。ここでいう学校教育法は第22条「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」<sup>2)</sup>である。

この二つのことからわかるように、幼児が過ごす場所である幼稚園は、幼児の心身の発育・発達にあった、健全な場所であり、心身の発育・発達の手助けをする場所でなければならないということになる。

柴崎らもその著書保育内容「環境」の中で、「学校教育法で使われている適当という言葉は、適切に近い言葉に近く、一人ひとりの幼児にとってふさわしいという、大変前向きかつ積極的な意味で使われている」<sup>3)</sup>としている。

教育基本法ではその第11条で「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない」<sup>4)</sup>としており、ここでも適当という言葉が使われているがこれも先の柴崎らの言っている<sup>3)</sup>適切に置き換えることができるものと考えられる。

このように幼児に関わるいろいろな法律の中で、幼児期の教育環境は重要でありかつ大切なものであるとうたっている。

これらの法律の中でうたわれている環境は、幼児の幼稚園における生活の場としての環境であり領域「環境」とは異なるものであることをまず理解しなければならないであろう。

そして、これらの生活の場としての環境は、すべてが目に見えるわけではなく、目に見える環境はもちろん整えやすいが、目に見えない環境もきちんと整えていくことが重要であると考えられる。

さらに幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容の中にある、「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活の姿からとらえたものであり、内容は、狙いを達成するために指導する事項である。各領域は、これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人とかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ示したものである」<sup>1)</sup>。この領域の一つに環境がある。この領域環境で最初にうたっているのが「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」<sup>1)</sup>とある。このことは先に述べた生活環境が整って初めて生きてくるものであると考えられる。

小川らはその著書「新・保育と環境」の中で、保育における環境を「人的環境」、「物的環境」、「自然環境」、「社会的環境」の4つに分類しそのそれぞれについて述べている(表1)<sup>5)</sup>。これは幼児を取り巻く生活環境として大変重要であると思われる。

これらのことから、各種法律の中でうたわれている幼児たちの過ごす生活環境と、領域「環境」の関わりについて考えてみたい。

\* 広島文化学園短期大学保育学科

表1 領域「環境」の分類

領域「環境」の分類	内容
人的環境	保育者、友だち、養護教諭、事務員、調理員、用務員などの職員
物的環境	園舎、園庭、玩具、遊具、素材、教材
自然環境	草花、樹木などの植物、虫、鳥、家畜などの動物、季節、天候、自然現象(雨・風・雪など) 林、山、川
社会的環境	園を取り巻く地域の特性、地域の文化、生活様式、生活習慣、子どもの家庭環境、地域の公共施設

小川ら<sup>5)</sup>

## 2. 幼児にとっての環境

### 1) 物的環境

#### ①生活空間としての教室

幼稚園設置基準<sup>6)</sup>により、教室の広さ、1クラスの人数は決められているため(表2)、基準が遵守されていれば幼児一人ひとりに十分な広さの生活空間が与えられることになる。この与えられた生活空間の中で遊んだり、学習を受けることになる。

またこの空間は健康で過ごせる空間でなければならない。目には見えないけれど適切な温度・湿度管理、適度な空気の入替えなどその空間を適切で健全に過ごせるための環境に保つための努力は必要となる。

このように、健康で過ごせるために充分整えられた環境の中で幼児一人ひとりの個性を活かした教育が行えると考える。

#### ②食事空間としての教室

今、新しく大きな幼稚園などであれば、ランチルームが設置されている園もあると思われる。しかし、設置されていても一度に園児全員を収容することは難しいと考えられる。

そうなると生活空間としての教室がランチルームにな

表2 設置基準

1学級の人数	35人以下
1学級の教員の数	1人
保育室等	職員室、保育室、遊戯室、保健室、便所
保育室の数	学級数を下回らないこと
園舎・保育室等の面積	1学級 180 m <sup>2</sup> 、2学級 320 m <sup>2</sup> 、3学級以上は1学級につき 100 m <sup>2</sup> 増
運動場	必置、園舎と同一の敷地内または隣接する位置 1学級 330 m <sup>2</sup> 、2学級 360 m <sup>2</sup> 、3学級 400 m <sup>2</sup> 、4学級以上は1学級につき 80 m <sup>2</sup> 増

幼稚園設置基準より抜粋

ることはやむを得ないであろう。

これまで何か作業していた机の上を片付け、きれいに拭くことでそこはランチルームになる。できれば一枚の布でもいいので机を覆うことで、遊んでいた空間とは違う雰囲気が出せるのではないだろうか。あるいは、子どもたちに少し大きめのハンカチを持たせてもらって、ランチオンマットの代わりにそれを敷くなど工夫をすれば、食事をするという新しい空間が生まれるように思う。

そして何より清潔でなければならない。食事をする場所というのは常に清潔が保たれている必要がある。そのためにも、まず教室が清潔であることが重要となることは言うまでもない。殊にそれまで遊びに使っていた場所が食事をする場所に変化するのであるから、清潔はしすぎるということはないと考える。

ランチルームを持っているところでは、給食の工夫ができる。例えば、バイキング給食など、年中、年長であればやり方をきちんと説明して理解させれば可能ではないだろうか。それまでに三食食品群のことなど学習しておく必要があるだろう。

決して多くの料理が並ぶ必要はなく2種類のうちどちらかを選ぶ。幼児なりに考えながら料理を選ぶことで幼児なりのバランスの取れた献立が出来上がるのではないだろうか。このことはひいては生きる力を身に付けることにつながる大切な体験の一つとなると考えられる。

#### ③遊び空間としての教室

絵本を読んだり、ブロックをしたり、積み木をしたりと、いろいろな遊びを幼児一人ひとりが工夫しながら、空間を上手に使って遊んでいる。

遊びの空間としての教室の使い方は様々であると考えられる。多くの遊びを教室という一つの限られた空間を使って自由に遊ぶ。幼児の工夫の範囲は大人のそれを超えるといっても過言ではないと思われる。そのためにも人数に応じた十分な広さの教室が必要となると考える。

#### ④学習空間としての教室

先生と一緒に歌を歌ったり、踊ったり、発表会の練習をするなど体を動かすこともある。

机上でお絵描きをしたり、工作をしたりすることもあるだろう。年長になれば数や文字の学習をすることもあるだろう。

学習も一つではない、教室という一つの空間を工夫して使うことで様々な学習が生まれてくる(写真1、2)。幼児の自由な発想を大切にしながら、一人ひとりときちんと向き合った学習が必要になると考える。

#### ⑤園庭

幼児は体を動かすことが好きだ。園庭で自由に鬼ごっこをしたりかくれんぼをしたり、遊具で遊んだり、砂場でままごとや泥団子作りなど、自由に体を動かすことになる。

この園庭の環境にも配慮する必要がある。多くの園庭

は土である。暑い時期には砂埃が舞い、幼児に良いとは言えない環境ができる。適度に水をまき砂埃が舞うのを最小限にするなど幼児の健康に配慮する必要がある。

砂場の管理も必要であろう。動物が入り込んでふんなどしないようカバーをかけたりして、清潔に保つ工夫などが必要になるであろう。

さらに紫外線の問題もある。殊に夏の強い日差しから幼児を守る工夫は必要であろう。

また、適度に水分補給の時間を設けて、定期的に水分を補給させていくことは熱中症や脱水症を防ぐ観点からも重要である。

## 2) 人的環境

### ① 教員

いろいろな場面には必ず幼稚園の教員が寄り添っている。たとえ短い時間とはいえ、家庭から離れ違う環境で過ごすことになる。そこで過ごす時間は不安なままで過ごすのではなく、信頼できる幼稚園の教員のもとで、過ごすことが最低条件となる。そのためにも幼稚園の教員は子どもたちに信頼される人材でなければならない。

小川らはその著書「新・保育と環境」の中で、「保育者が一方的に知識や技術を教えたりするのではなく、保育者は子どもが必要な体験が得られるような環境を用意することで、子ども自ら生きる力を育てることにつながる<sup>5)</sup>と述べており、いろいろな場面で幼児たちが行ういろいろな活動は、子どもたちが主体的に行うのであって、教員はその環境を整え、援助者となるべきであるということをやっている。

これは、子どもの主体性をいかに育むかということで、いろいろ口出しをすることは簡単だが、子どもができることは子ども自身が考えやってみることが大切で、このことで子どもの主体性が伸ばされていき、いろいろなことに挑戦することにつながっていくと考える。幼稚園の教員がどういう関わり方をするかということは幼稚園の教員の資質が問われることにつながるのかもしれない。

また、幼稚園に入ったばかりの頃の子どもたちは、不安がいっぱいでどうしていいかわからず、親から離れ知らない場所にいるという恐怖心ばかりがつのるだろう。幼稚園の教員はそんな不安を抱えている子どもたち一人ひとりの気持ちを汲んでやる必要がある。そしてここは子どもたちの居場所であるということをしつづわかってもらう必要がある。そこに幼稚園の教員がいかにかわるかは幼稚園の教員の資質が問われることになるであろう。

### ② 友人

1クラスの人数約35人の中で一人ぼっちで過ごす子どもは数少ないと思われる。ほとんどの子どもたちが遊びを介して友人がいるのではないだろうか。教室内で遊ぶにしる、園庭で遊ぶにしる、気の合う友人と一緒に思い

を交わせながら遊ぶことの大切さを学び、そこに一つのルールが生まれてくる。子どもたちなりの遊びのルールだ。そのルールに「違うよ」はない。なぜなら子どもたちが一生懸命に考えて決めたことだから。それがその子どもたちのルールだからである。違う場所、違う仲間が集まればまた新しいルールが生まれるであろう。

時にはいさかいもあるだろう。社会性が出てくれば譲り合うということの大切さに気付けるようになるが時間が必要だ。しかし、いさかいも学習の一つであると考えられる。いさかいを通して学べることもたくさんあるからである。

### ③ 幼稚園に勤務する人たち

幼稚園にいるのは幼稚園の教員と園児だけではない。

送迎用のバスのある所ではバスを運転してくれる人がいる。そしてそれは当たり前ではない。きちんと挨拶をし、送り迎えをしてくれることに感謝する大切さを学ぶことが必要となる。

園内に給食施設のある幼稚園では給食を作ってくれる人がいる。給食は当たり前に出てくるのではなく、いろいろな人の手を経て、自分たちの元に届くということを知り、そのことに感謝することの大切さを学ぶことが必要となる。

職員室には事務を担当する方もいる。直接幼児と接することは少ないかもしれないが、幼児の目に見えない環境、室内の温度・湿度、部屋の換気、園庭の水まきなど幼児は知らず知らずのうちに恩恵を受けていることになる。

このように園にいる多くの人がいって初めて幼児の生活が守られているということを幼稚園の教員は園児にきちんと話し感謝するという気持ちを持つことを大切にさせる必要がある。

### ④ 保護者

幼児が一番長く過ごす場所は保護者のいる家庭である。そこから幼稚園という別の場所に通うのである。保護者は誰よりも自分を大切にしてくれる大事な存在であることに気付くことが必要だ。それは幼稚園の教員とは異なる大切なされ方だ。幼稚園に行っている間離れていた時間にあった様々な出来事を話し、そしてそれを受け止めてくれる大事な存在であることに気付くことが大切だ。叱られることもあるだろう、だがそれも自分を大切に思えばこそであることを知らなければならない。自分にとって、一番安心できる場所、それが保護者のいる家庭であるということをして大事にするべきであり、保護者もそれにこたえてやるべきであろう。

保護者も幼児のいろいろな気持ちを受け止めるだけの発達過程を知ることや、成長を喜ぶことが必要だ。そのためにも保護者は、幼稚園で行われる行事などに協力、また参加することが必要であり、このことが教員との連携につながる。そしてこのことは教員と保護者の信頼関

係を強めることにつながるのだ。幼児の成長は保護者の想像の範囲を超えることもあるだろう。それらを全て受け止めて保護者として幼児が安心できる環境、すなわち安心できる家庭という場所を作ってやるのがなにより必要であり大切なことである。

#### ⑤地域人材

地域には多くの人が住んでいる。自分たち家族だけではない、幼稚園にいる人たちだけではない、地域の人々の存在に気付かなければならない。そしてその地域の人々の恩恵にあずかっていることも知ることが必要だ。例えば芋ほりの畑を貸してくれる人、スーパーマーケットで働いている人、病院のお医者さんや看護師さんたちなどなど、家族だけではない多くの人が自分を支えてくれていることを知ることはとても大切であり、またその方たちに感謝する気持ちを持つことが必要不可欠である。そしてそのことを保護者や幼稚園の教員は折に触れて伝えていくことが必要になると思われる。

### 3) 社会的環境

#### ①地域の施設

いろんな場面で園外に出ることはあると思われる。そこは園内とは全く違う場所、すなわち社会であり地域だ。幼稚園がある地域にはいろいろな施設がある。小学校、病院、スーパーマーケット、図書館、公民館、公園など自分たちの知らない施設がたくさんあることに気付く。そこでどんなことが行われているのか、自分たちの園とは全く異なることが行われていることを知ることになる。そしてその仕事の内容を知ることが不思議と納得のいろいろな知識が交錯する。そしてそこは公共の場であることを理解することが大切になる。公共とは、自分たちだけのものではない、地域に住む多くの人たちのものであることを知ることによって、その一つひとつの場所を大事にすることを学習し、大切に思う気持ちを持つことにつながっていく。

また地域の行事や、年中行事など、家庭でありすぎるものの少なくなってきた伝統ある行事についても体験させていくことは大切なことである。すべての行事に参加することは難しいかもしれないが、日本の文化を継承していくことの大切さは理解してほしいものだ。

#### ②地域の自然

幼児の周りには自然がたくさんある。園内、園外、そこでいろいろなものと出会い、「？」を蓄積してくる。幼児の出会った自然のいろんな「？」に応えることが幼稚園の教員には必要だろう。幼児の興味は、大人の想像の範囲を超える。その想像の範囲を超える自然への興味関心を失ってほしくないと思う。そのためにも幼稚園の教員は自然のことをたくさん知っておいてほしいと思う。

園内で植物を育てることや(写真3, 4)、小動物を飼う機会もあるかもしれない。そのとき、植物にも動物に

も命があり、その命を大切にしなければならない気持ちを持つことを教えていくことは大切なことだ。合わせて命に限りのあることを知ることもまた一つの学習となる。

また日本には四季がある。この四季によって環境が違い、自分たちの生活が変わることに気付くことも大切になる。季節ごとに生活の仕方が変化することに気付き、それに応じた生活の仕方を身に付けていくことは生きる力を身に付けることのひとつにつながる。

#### ③地域の人材

①で述べたいろいろな施設にはそこで働く人たちがいる。働く人たちに感謝する気持ちを持つこと、言葉遣い、あいさつの仕方など、園内とは違う人たちへの接し方を学ぶことになるのだ。

地域外でも同じだ。多くは学習のために出かけるであろう、そこで知らない人へのあいさつ、接し方、言葉遣いなど、普段幼稚園の教員や友人たちに対するものとは違うことを知らなければならない。学習しなくてはならないのだ。

そこで自分たちが普段過ごす場所だけではなく、地域や社会が存在すること、また多くの人が働いていることに気付くことは重要なことである。そして自分たちは多くの人の恩恵を受けていることに感謝することを忘れてはならない。

### 3. 保育内容領域「環境」

幼稚園教育要領解説<sup>7)</sup>の中の環境の内容として挙げられているものは次のようなものがある。

(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

自然は園の内外に存在する。殊に園外には多くの自然がある。この園外の自然に触れることによって、大きさ、美しさ、不思議さに触れることが、また感じるができるのではないだろうか。四季によって異なる花や木の様子、木々の美しさ、四季によってなぜ違うのか、その不思議を幼稚園の教員にぶつけてくる。幼稚園の教員はそれに応えてやれるだけの引き出しを持っていなければならない。

(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。

日々の生活の中で幼児たちはさまざまなものに触れる。例えば蛇口をひねれば水が出る、どうして、さらにその温度が季節によって違うこと、どうして、周りにあるものすべてが「？」の集合体なのだ。このことに幼稚園の教員は応えてやれるだけの引き出しを持たなければならない。

(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

(1)でも述べたように日本には四季がある。その季節によって自分たちの生活が変化していることに気づくこ



写真1 身近な素材を使って（リースづくり）



写真2 年中行事の壁面構成

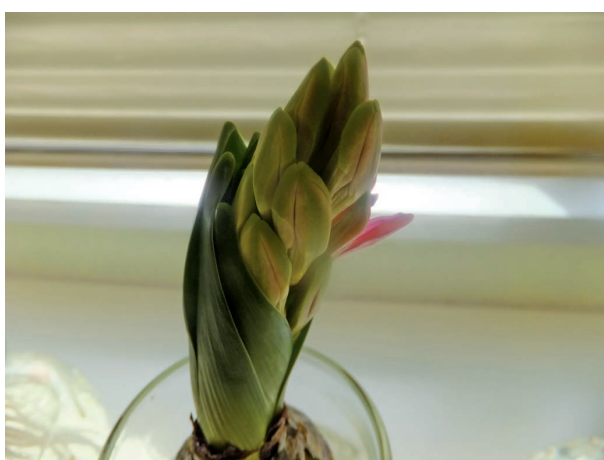


写真3 ヒヤシンスの水耕栽培（つぼみ）



写真4 ヒヤシンスの水耕栽培（開花）

とが大切だ。洋服の違い、室外の温度が違う、それに比べて室内の温度を変化させていること、様々なことに気付くことが大切になる。ただ漠然と過ごしているのではなく、「なぜ」の気持ちを持つことが大切になる。

(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取入れて遊ぶ。

(1) でもふれたように自然の不思議さに気付きそれに心を止めることが大切になる。例えばどんぐりが落ちていれば、集めて何ができるか考える。木によってどんぐりの大きさの違いに気付くかもしれない、帽子のついていないもの、いろいろなことに気付きそれをいろんな遊びに使っていく工夫をするのだ。

(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

自然に触れる時それを大切に思う心に気付かせる。木にも花にもそして小さな虫にも動物にも命のあることの大切さに気付かせる。いたわり、大切にすることを大切さを大事に丁寧に指導していくことが必要となる。そして、その命に限りのあることを教えることも重要になってくる。

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

この項目は今回の改定で新たに加わったものである。家庭において地域の特性や行事、伝統、文化に触れる機会が減少してきた昨今だからこそ、園も家庭も地域の中にありその恩恵にあずかっていることの大切さを知ることが重要となる。伝統文化や行事について、すべてではないにしても触れることによって、日本古来からあるこれらの文化を継承していこうとする心を持たせることの大切さが必要になってくるのではないだろうか。しかし、園においてもすべてのことができるとは限らない。実施できない行事は壁面構成などを利用して子どもたちに伝えることも一つの方法だろう。しかし、実際に体験することでより深く記憶に刻まれることもあるので、園にとっても難しい課題だと思われる。

また国際社会といわれる中において、外国への関心、多文化を尊重することも必要になってくるとと思われる。

(7) 身近なものを大切にする。

自分たちの使うおもちゃや遊具、皆が使うものだからこそ大切にするという心を持たせること。そのことがひいては公共のものを大切にする心につながると思う。

(8) 身近なものや遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試し

たりして工夫して遊ぶ。

自分が使ういろんなものをただ使うのではなく、こう使ったらどうなるだろう、こんな使い方はできないだろうか、これとこれを一緒にしたらどうなるのかと考えながら使うことの大切さ。それは発想の豊かさにつながる。大切に扱うのであれば、それは「ダメだよ」の使い方はないはずだ、その工夫する心を伸ばしてやるのが大切になるのではないだろうか。

(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。

自分の生活の中に数のあることを知る、自分の持っているものが一つ、友達の持っているものが一つ、合わせるといくつになるのか。2つあるから2人で持てることが分かる。なすびの形、キュウリの形似ているけど違う形、丸いもの四角いもの違う形。自分の周りにはいろいろな数がありいろいろな形があることに関心を持つことは他のいろいろな物に興味を持つきっかけになる。

(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。

園内外にはいろいろな文字や標識があふれている。これは同じこれは違うことに気付くこと。

園外に出たときに交通標識の一つひとつに興味を持ち意味を理解する。次に同じ形を見たとき、どう行動すればよいかということにつながっていく。一つずつ覚えていくことが大切になる。

(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心を持つ。

情報化社会の中で、大人でも正しい情報を見分けていくことは難しい。しかし、幼児は自分の興味のある情報にしか興味や関心を示さないのではないだろうか。何にも関心を示さないのも困りものであるが、いろいろなものに興味を持ちすぎるのもどうであろうか。正しい情報を与えてやることや施設に関心を持つ心を大切にすることが必要だろう。

(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

いろいろな行事で国旗が飾られることは多い。その国旗に興味を示し、親しみを持つことは、その国のことを知る第1歩になるのではないだろうか。すべての国旗の国の名前を覚えるというのではなく、違う国があり、その国にはそれぞれその国の旗があることを知るの大切なことだと思う。

このように、領域環境の内容は多岐にわたる。自然、日常生活、命の大切なこと、伝統や文化、身近な道具、数や図形、文字や標識など。自分たちが生活していくうえで基盤となることを一つひとつ理解し、わからせることが必要であり、またそれはとても大切なことだ。一度に何もかもではなく、一つひとつ何かの機会に、主体的にできるようになり、感じるができることが必要なのではないだろうか。卒園までの2ないし3年間の発達

の中で一つづつ積み重ねていくことが必要であり、ひいてはそれが生きる力につながるのではないだろうか。

吉田らはその著書「環境」の中で、「これら様々なものに好奇心や探求心を持ち主体的にかかわる中で、興味や関心を広げ、美しさや不思議さに心を動かしたり、発見する喜びや試す面白さ、考えたり工夫したりする楽しさを実感し、物に関わることへのうれしい気持ちを身に付けていく。それと共に、物の特徴や性質を体験的に理解し、納得し、自分の生活や遊びに取り入れてさらに生活を豊かにしていく。単なる正確な知識の獲得や文字・数の習得ではなく、興味や関心を持って自らが対象にかかわり、自分の必要感から活動を展開したり追及していくことが乳幼児にとって意味があり、発達を支えていくことにつながる」<sup>8)</sup>と述べている。

このことは、日々の生活の中で起こる、特別なことではない日常生活の中でいろいろなことを直接体験し、いろいろなことに会い、いろいろなことを試してみることを主体的にやっていくことの大切さをうたっているのではないだろうか。

領域「環境」は決して特別なものではない。先に述べた12の項目を一つひとつ実践しようと思うと無理が生じてくるが、日々の生活の中で直接体験することで、主体的に獲得していけることでもあると考える。

#### 4. モデルカリキュラムの調査研究<sup>9)</sup> から

平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究<sup>8)</sup>(以下モデルカリキュラムという)には領域「環境」について次のように書かれている。

全体目標：当該科目では、領域「環境」の指導に関連する、幼児を取り巻く環境や、幼児と環境との関わりについての専門的事項における感性を養い、知識・技能を身に付ける。

(1) 幼児を取り巻く環境

一般目標：幼児を取り巻く環境と、幼児の発達にとっての意義を理解する。

到達目標：1) 幼児を取り巻く環境の諸側面(物的環境、人的環境、社会的環境、安全等)と、幼児の発達におけるそれらの重要性について説明できる。

2) 幼児と環境との関わり方について、専門的概念(能動性、好奇心、探求心、有能感等)を用いて説明できる。

3) 知識基盤社会及び持続可能な開発のための教育(ESD)などの幼児を取り巻く環境の現代的課題について説明できる。

(2) 幼児の身近な環境との関わりにおける思考・科学的概念の発達

一般目標：幼児期の思考・科学的概念の発達を理解する。

- 到達目標：1) 乳幼児期の認知的発達の特徴と筋道を説明できる。
- 2) 乳幼児の物理的、数量・図形との関りの事象に対する興味・関心、理解の発達を説明できる。
- 3) 乳幼児の生物・自然との関りの事象に対する興味・関心、理解の発達を説明できる。

(3) 幼児の身近な環境とのかかわりにおける標識・文字等、情報・施設との関りの発達

一般目標：幼児期の標識・文字等、情報・施設との関りの発達を理解する。

- 到達目標：1) 乳幼児を取り巻く標識・文字等の環境と、それらへの興味・関心、それらとの関わり方を説明できる。
- 2) 乳幼児の生活に関係の深い情報・施設と、それらへの興味・関心、それらとの関わり方について説明できる。

〔留意事項〕

- 1) 各専門的事項については、その根拠となる発達心理学などの理論や概念を抑えるとともに、幼稚園教育の基本などの幼児教育に関わる専門性に基づいて指導をする。
- 2) 領域「環境」の背景となる学問的基盤や幼児教育に関わる専門性を有する人材が担当するにふさわしい。このモデルカリキュラムでは、説明できるようになることを中心に据えている。説明できるということは、幼児と教員が一緒にいろいろなことをするというに通じるのであろうか。

また、環境だけではなく、乳幼児の発達のことも理解していなければならないように感じる。確かに、乳幼児の発達段階が今どのような状態であるかを理解していなければ、「環境」のいろいろな課題をクリアすることはできないので当然であるといえれば当然である。

#### 教員養成施設の役割

このことは、教員養成施設において「環境」の授業だけを一つの科目として単独としてみるのではなく、他の多くの科目、特に発達に関わる科目と関連付けて理解することが必要となるということになるのではないか。

しかし、現状ではどの科目においてもシラバスの内容を実施することに追われて、他の科目との連携や内容を取り入れて話をしていくことは難しいのではないかと考える。

確かに内容を説明することはできても、発達に応じていなければ意味をなさないことはよく理解できるが、教員養成施設の教員としてどこまで範囲を広げて講義をすることができるのか、教員養成施設の教員の力量にかかってくるのであろうか。

また、教員養成施設の教員が、他の科目と関連付けて講義をし、発達の科目と関連付けて「発達の授業と関連させて考えるように」と学生に伝えて、どれだけの学生がそのことに重きを置いてくれるのであろうか。

しかし、それができなければ領域「環境」の内容が生きてこないのであれば、一生懸命説明し学生に理解させるだけの力量を教員養成施設の教員として身に付けることが大変重要となる。

#### 5. 領域「環境」との関わり

幼児が、その発育・発達に応じた適切な環境で、安心・安全に過ごせる場所がここにはあるということを理解して、初めて領域「環境」の学びは生きてくると考えられる。

これまで述べてきたように物的環境（生活空間、園庭など）、人的環境（教員、友人など）、社会的環境、自然環境などがきちんと整って初めて幼児を受け入れることが可能になると考える。

これらは、モデルカリキュラムの中の「(1) 幼児を取り巻く環境の到達目標の1) 幼児を取り巻く環境の諸側面（物的環境、人的環境、社会的環境、安全等）と、幼児の発達におけるそれらの重要性について説明できる」<sup>9)</sup>、にも出てくるように、なぜこれらが必要なのか説明できるようにできなければ幼児の生活環境を整えることはできない。生活環境が整って初めて領域「環境」が生きてくるのだ。

生活環境が落ち着き、幼児が幼稚園の教員の方を向き幼稚園の教員の指示を聞くことができるようになればおのずと領域「環境」の内容の一つひとつはクリアできると考える。合わせてモデルカリキュラムにもある一般目標、到達目標も併せて説明することが可能になると考える。

#### 6. ま と め

幼稚園における環境には、幼児が生活する生活環境と、領域環境の二つあると考えられる。しかしこの二つは全く別のものではなく切り離して考えられるものではない。

その一つである幼児がそこで生活をする生活環境が十分な形で整えられることが、すなわち健全性、安全性、生活などが整えられ幼児が心地よく過ごせるということが分かって初めて、二つ目の環境であるいわゆる領域「環境」が生きてくるのである。

さらにその領域「環境」に関する内容を幼児に説明したり、植物の栽培活動などを一緒に行っていく際には幼児の発達についてしっかりと理解しておくことが必要となる。

このことを学生たちに理解させるためには教員養成施設での学びが重要となる。環境はただ環境の中身だけが分かって成り立つのではなく、他の教科のこともよく理

解したうえで環境が成り立つということを学生たちに十分に理解させる必要がある。特に、幼児の発達との関りは特に大きい。このことを教員養成施設でいかに学生に学ばせるか教員養成施設の教員の力量が問われることとなる。

そして、子どもたちが生活する生活環境と、領域環境の二つの環境はいつも車の両輪として進んでいるのだということを学生たちに十分に理解させることが特に重要になってくるように思われる。

## 7. 謝 辞

この論文を執筆するにあたりご指導いただいた清見嘉文教授に感謝申し上げます。

## 参 考 文 献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領，2017年，フレーベル館，東京
- 2) 文部科学省：学校教育法，2017年，文部科学省
- 3) 柴崎正行・若槻芳浩編：保育内容『環境』，p4，2018，ミネルヴァ書房，東京
- 4) 文部科学省：教育基本法，2006年，文部科学省
- 5) 小川恵子・矢野正編著：新・保育と環境，pp3～5，2019年，嵯峨野書院，京都
- 6) 文部科学省：幼稚園設置基準，2014年，文部科学省
- 7) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，2018年，フレーベル館，東京
- 8) 吉田 淳・横井一之編著：環境，p24，2018年，福村出版，東京
- 9) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究，2018年

## Summary

It can be said that there are two “environments” in a kindergarten: the daily life environment in which the children go about their daily lives, and the academic field of “Environment”. However, the two are not unrelated, and are not to be thought of separately.

Only once it is deemed that the first one, the daily life environment in which the children spend their daily lives, is ensured in a satisfactory manner, that is to say, soundness, safety, cleanliness, and the like are provided and the children can live comfortably, does the second environment, the so-called academic field of “Environment”, come to hold meaning.

Furthermore, when explaining content on this academic field of “Environment” to children or doing activities such as cultivating plants together, it is necessary to thoroughly understand the development of children.

Learning at a teacher training facility is important for making students understand this point. The field of “Environment” is not established just by understanding the content of that field, but is established by having an understanding of other subjects as well. It is necessary to make students thoroughly understand this. The relationship with the development of children is particularly significant. The competency of faculty at training facilities is tested by how they make students learn this point at the training facility.

It is also believed to be particularly important to make students sufficiently understand that the two environments comprising the daily life environment in which the children go about daily life and this academic field of “Environment” always work together like two wheels of a bicycle.